

Ⅱc がわかる 80 例

早期胃癌診断のエッセンス

多田正大

(多田消化器クリニック)

消化管画像診断学を極めるための近道はない。多くの典型症例を経験・見聞して、頭の中のフィルムライブラリーに記憶しておくことからスタートしなければならない。一朝一夕に完成するものではなく、多くの時間と労力を要する。そのうえで見せられた画像が自分の経験例とどこが違うのか、どの点に類似点があるのかを考え、診断過程をたどる応用力を養うことが大切である。遠回りしてでもコツコツ、地道に症例を集積して、自らの診断力を磨くことがすべてである。その意味では『胃と腸』誌の「今月の症例」コーナーを熟読することで、素晴らしい画像診断学を身につけることができる。これは提示される X 線・内視鏡写真が卓越した水準にあるからであり、『胃と腸』誌が読者から支持されているゆえんもここにあると思う。

胃癌の診断においても多くの症例を経験することが画像診断のスタートである。なかでもⅡc 型早期胃癌の画像を理解することは診断学の基本であり、そこから病変範囲や深達度診断の読影、類似病変との鑑別などに役立てることができる。X 線像と内視鏡所見、マクロと組織像を丹念に対比することから胃癌診断学が展開される。地道で苦勞が多い作業であるが、これが王道であると私は信じている。

私が尊敬する中野浩先生は頑なに消化器診断学の王道を追求した

学士の一人である。早期胃癌研究会や『胃と腸』編集委員会の中で、中野先生の診断学に対する情熱、篤い精神を拝聴する機会はしばしばあった。中野先生は胃癌診断だけでなく、食道、小腸、大腸、胆膵などのあらゆる臓器、そして腫瘍だけでなく炎症性疾患の画像診断にも長けており、妥協せずに持論の診断学を展開する態度に私たちは感服させられていた。消化管診断学も拡大内視鏡診断、超音波内視鏡、NBI 診断など高い水準の読影力が要求される時代になっている。その結果として「大腸は専門分野であるが、胃癌の診断はできない」という困った専門医が増えていることも事実である。これでは学者としては尊敬されても、実際に患者を診療する臨床医としては失格である。このような状況にあっても、中野先生は恩師である中澤先生、熊倉先生、白壁先生、八尾先生などの先達から学んだ胃診断学をひろげて、いわゆる比較診断学を展開してあらゆる臓器の画像診断に挑んだ素晴らしい精神の持ち主である。消化器病医のあるべき姿、王道を歩んできた数少ない学徒である。

その中野先生が『Ⅱc がわかる 80 例』を上梓された。見事なⅡc 型早期胃癌の画像が列挙されており、きれいな写真を見るだけで圧倒される。近来まれにみる編集方針であり、拡大内視鏡も超音波内視鏡画像もなく、旧来の X 線と通

常内視鏡写真でⅡc の本質に迫ろうとする志の高い内容である。まわりくどい文章は極力少なくして、きれいな X 線・内視鏡画像でⅡc 型早期胃癌や類縁疾患の典型例を提示し、切除標本と病理組織像を対比させて画像診断のエッセンスを問う書籍である。まさに『胃と腸』誌創刊時の伝統とする編集方針を地でゆく構成であり、難解な文章が少ない分、肩が凝らずにⅡc を理解することができる。

特に提示された X 線画像は秀逸である。内視鏡偏向の今の時代にあつて、本書に提示されたような質の高い X 線像を撮影できる医師や放射線技師が少なくなっているだけに、X 線から切除標本まで揃った貴重な 80 症例を集積した努力に対して頭が下がる。X 線写真の焼付けを担当したフォトセンサー・田島武志氏の尽力なくして、これだけ素晴らしい画像診断学の書籍の発刊はできなかったであろうが、このあたりの経緯は本書の長い序文に如実に記されている。中野先生の研究歴、人脈が余すところなく記述されており、本書の出版に賭ける篤い思いがうかがえる。

本書は胃癌診断学を極めようとする初心者からベテラン医まで、さらに放射線技師にとっても、画像診断学の原点に回帰する貴重なパイプである。おそらくここ当分の間、この書籍の画像、内容を超える名著は出現しないのではないかと考える。傑出した内容であるからこそ、一人でも多くの消化器病医、放射線技師に愛読され、提示された典型例の画像を記憶してほしい。そこから消化管画像診断学の王道が始まると期待する。

●B5/頁 212/2008 年/定価 8,400 円
(本体 8,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-00642-2]
医学書院 刊